

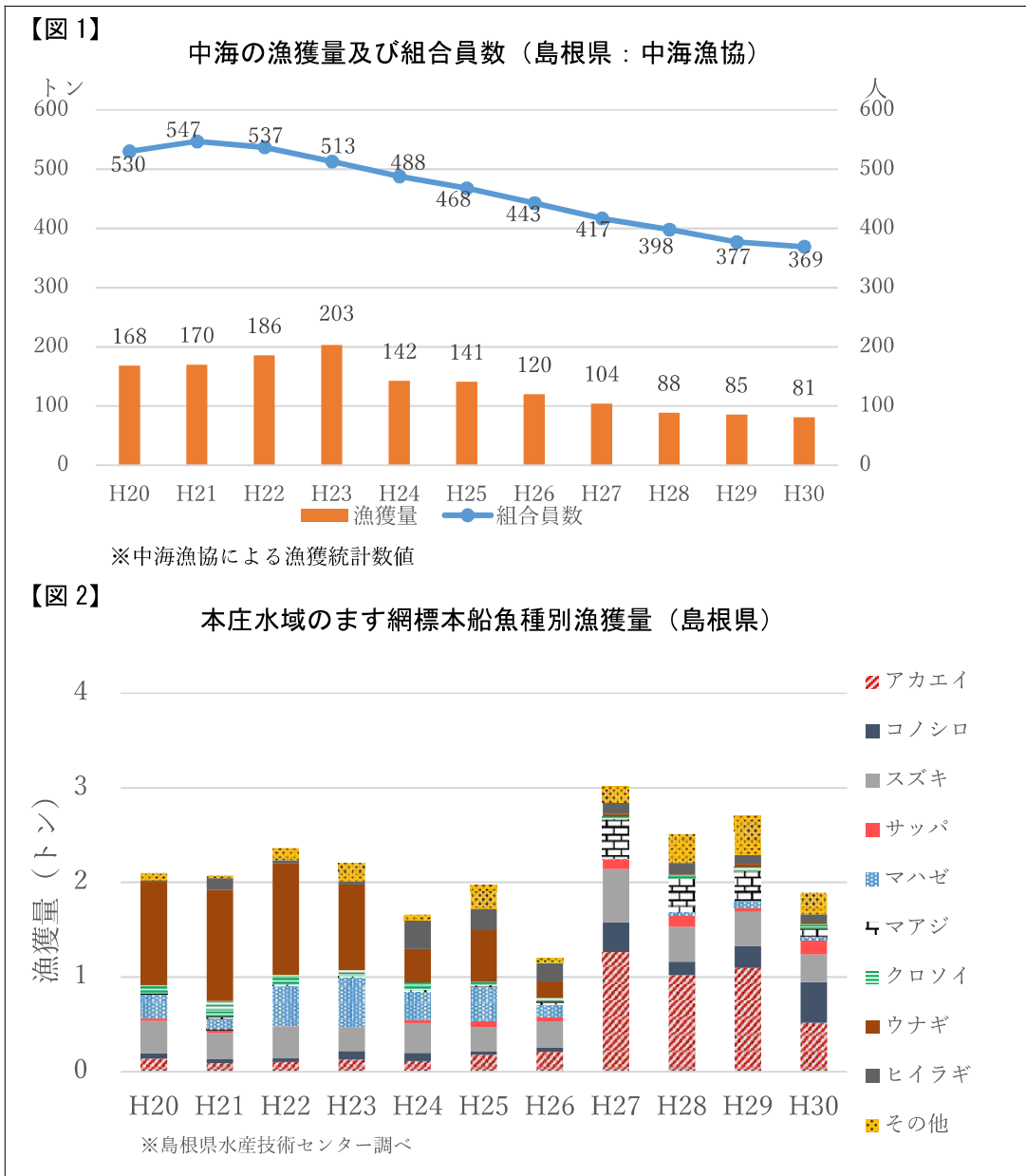
中海の水産資源の現状について

島根県・鳥取県

昨年度の第 10 回中海会議において、首長の方々から水産資源の減少についての懸念が示されるとともに、水質の改善と水産資源の減少との関係について分析が必要との意見を踏まえ、漁獲量や漁業者数などのデータをもとに、中海の水産資源の現状について考察を行った。

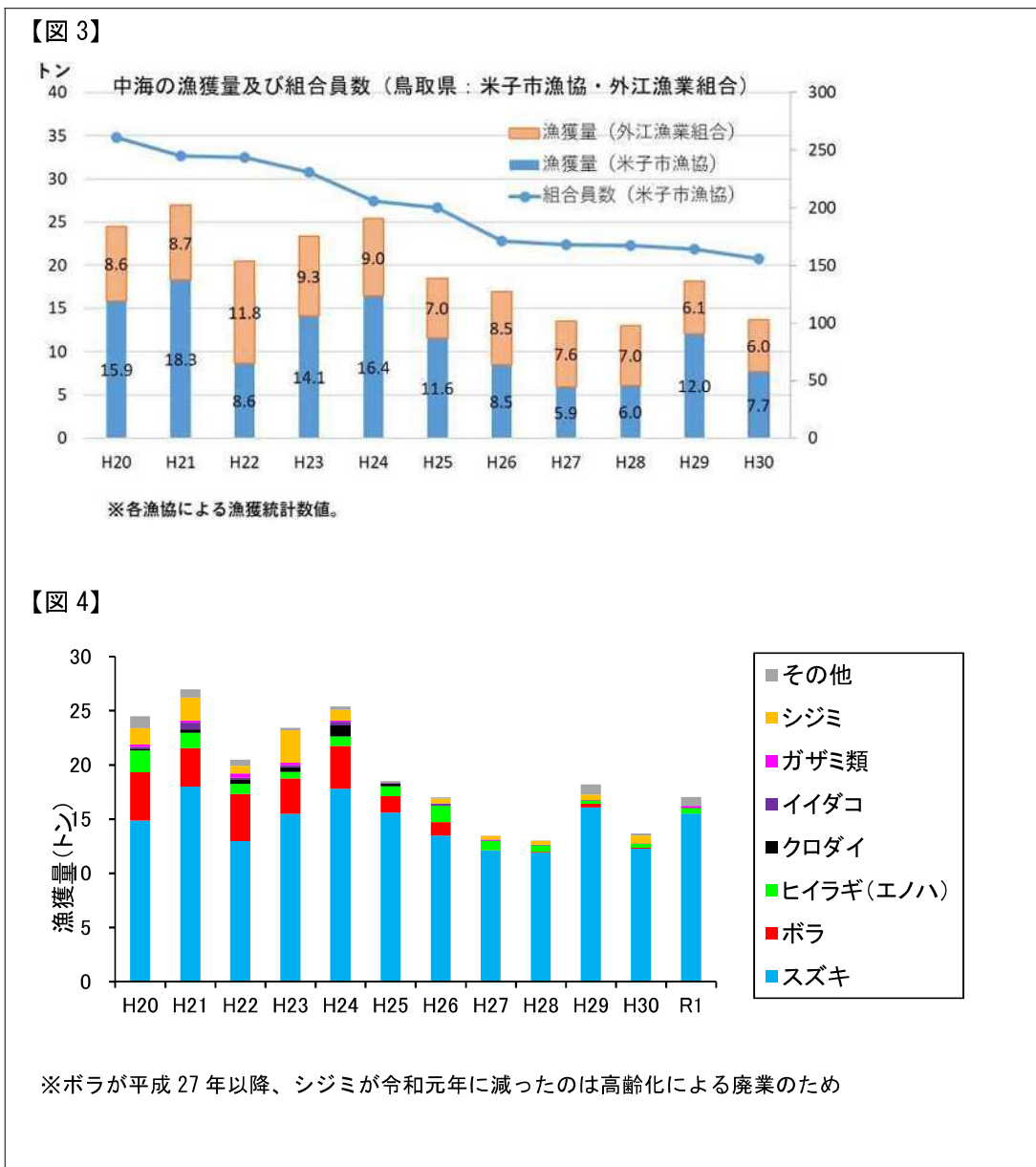
1 島根県側の水産資源の推移

- ・中海における島根県側の漁獲量は平成 20 年に約 170 トンあったものが、現在（平成 30 年）は約半分（81 トン）にまで減少している（図 1）。
- ・一方、中海漁協の組合員数も減少傾向にあり、平成 20 年に 530 人であったものが現在（平成 30 年）は約 3 分の 2（369 人）となっている（図 1）。
- ・また、本庄水域の主な漁業種類である「ます網（小型定置網）」について標本調査の結果を見ると、魚種の変化は見られるものの、漁獲量はここ 10 年間 2 トン前後で推移（図 2）。



2 鳥取県側の水産資源の推移

- ・ 中海での漁獲量は、平成 20 年に約 24 トンであったが、現在は、約 3 分の 2 の約 14 トンまで減少している（図 3）。
- ・ 一方、漁業者のうち、米子市漁協の組合員数は減少傾向であり、平成 20 年に 278 人であったが、現在は約 3 分の 2 の 164 人まで減少（図 3）。ただし、そのうち中海で操業している者は 20～30 人程度。
- ・ 魚種別の漁獲量は、平成 20 年はスズキ、ボラ、ヒイラギ、シジミの順で多く漁獲されていたが、ボラやシジミを漁獲する漁業者の廃業もあり、現在はスズキが大半を占めている（図 4）。



3 まとめ

漁獲量は、鳥取、島根両県ともに年々減少傾向であり、その背景には、漁業者の減少と高齢化の進展による操業効率の低下（操業日数・時間の減等）が一つの要因と考えられる。

現在、下のような水産振興の取り組みを進めているところであり、その成果も見られつつある状況。



サルボウガイのかご養殖試験
(漁業者の創意工夫により、サルボウガイが復活)



マハゼの陸上養殖
(中海で採取した稚魚を用いた陸上養殖)

○その他、アサリのかご養殖、ウナギの稚魚放流等の取組を行っている。